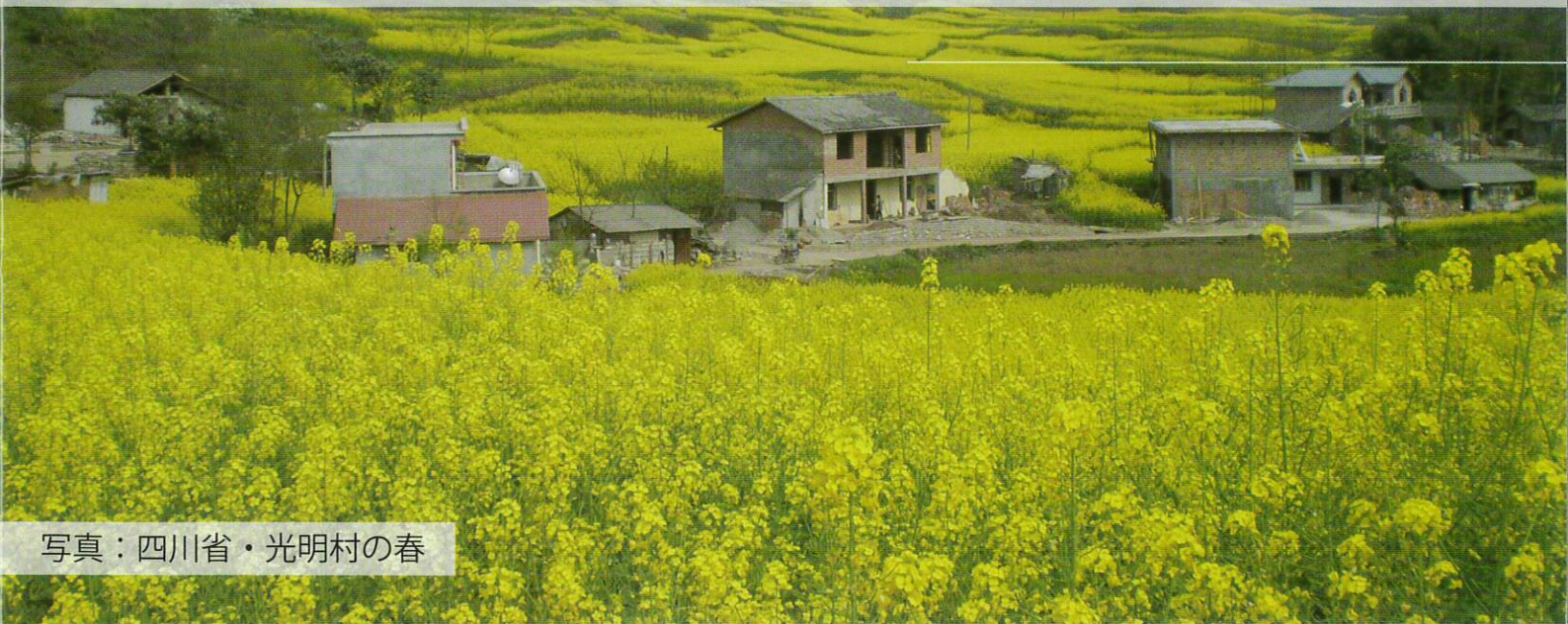




写真：四川省・光明村の春

巻頭言「将来世代を念頭におき、 彼らの幸福を熟慮せよ」

昨年は豪雨災害、地震、台風、高潮などの災害が相次ぎ、風評被害や北海道では全道停電という複合災害も伴い、各地で甚大な被害をもたらした。しかしこの災害は、想定外の災害とは言えず、過去にも幾度となく起こった同様の災害だけに、悔しい思いの繰り返しだった。「過去に学ばない者は、未来に学ぼう」という指摘があったが、少なくとも阪神・淡路大震災以降の24年間失敗を含む多様な経験からの学びをしっかりと伝えてきたのかと自省の念にかられる。

さて、来年1月17日で阪神・淡路大震災から25年を迎えることになる。あれから25年を前にして、支援の担い手も世代交代を迫られている。まだまだ NGO として力不足ではあるが、この間災害支援を通してさまざまなことを学んできた。このかけがえのない財産を、未災地はじめ将来世代を担う人たちに引き継いで行かなければならない。幸い CODE には最近、高校生が少しずつ増えてきた。彼ら、彼女らは将来世代が NGO で実習体験（フィールド研修や6ヶ月間のインターン）をする「CODE 未来基金」事業に参加しているからだ。

こうした機会を活かして、将来世代のために、成功体験のみならず、失敗体験をも臆せず伝えて行きたいと思う。北アメリカの先住民イロコイ族が築くイロコイ連邦では、7世代後の人々になりきって考えるという憲法「結束法」がある。その法には、「将来世代を念頭におき、彼らの幸福を熟慮せよ」と記されている。

Contents	Page
巻頭言	1
特集：2018 年インドネシア	
地震・津波災害	2～6
通年型インターンシップを	
経験して感じたこと	7
CODE 未来基金 NEWS	8～9
食と国際協力	10～11
プロジェクトレポート	12
会員・寄付者ご芳名	13
イベント案内	13
スタッフ活動記録・今後の予定	14～15
活動へのご協力のお願い	16

特別寄稿 ～インドネシアから～ エコ・プラワット

2018 年インドネシア地震・津波災害 (ロンボク島地震、スラウェシ島地震、スンダ海峡火山津波)

2018 年、インドネシアでは災害が相次ぎました。7 月・8 月にロンボク島地震、9 月にスラウェシ島地震津波、12 月にスンダ海峡火山津波が発生し、いずれも大きな被害をもたらしました。CODE は現地カウンターパートである建築家のエコ・プラワットさんと連携し、救援活動を行っています。エコさんから届いた今回の災害に寄せる思いをご紹介します。

Living in the Land Ring of Fire

Indonesia is a country surrounded by the very dynamic geological nature. Hundreds of the active volcanoes as well as constantly moving geological plates weaved harmoniously into a more than 17000 of islands. So the earth is literally constantly shifting and shaking.

This natural phenomena is very fundamental to our culture, it became a local wisdom in many ways like choosing the sites, building construction and folklore stories showing how we should live in harmony with the nature. But this knowledge is facing the real challenge with our modern way of life. Most of the people in this generation almost forgot about that local wisdom, the knowledge from the past only hidden in the mind of older generation.

In the last recent years the awareness about the idea of disaster or natural disaster getting stronger due to many happenings such as big EQ and tsunami in Aceh 2004, the EQ in Yogyakarta in 2006, then Merapi volcano eruption in 2010, then another EQ in Padang, Tasikmalaya, and other places..

It seems that geologically speaking the nature still finding the new balance formation, but socially people also believe that it must be a 'spiritual warning' that we should reflect concerning our daily life.

The big disaster seems still continuing...recently in Lombok Island and Palu - Sulawesi Island, and mount Anak Krakatau eruption in Sunda strait.

環太平洋火山帯の土地に生きる

インドネシアはとてもダイナミックな地質の性質をもっている国です。何百という活火山や絶えず動いているプレートが、17,000 以上の島々を織りなしています。つまり、地球は文字通り、常に動いていて、揺れているのです。

自然現象は私たちの文化にとって不可欠なものです。例えば何かのために場所を選ぶとき、建物を建てる時、私たちがいかに自然と調和して生きるべきか教えてくれる民俗伝承の中でなど、自然現象はさまざまな形でローカルな知恵となっています。しかしこの知識は生活様式の近代化に伴い、現実的な問題に直面しています。今の世代の人たちの多くはローカルな知恵をほとんど忘れてしまっていて、昔からの知識は高齢世代の頭の中にだけ残っています。

近年発生した多くの災害によって、災害あるいは自然災害に対する意識が強くなっています。例えば 2004 年アチェの大地震と津波、2006 年ジョグジャカルタの地震、2010 年メラピ火山の噴火、それからパダンやタシクマラヤなどでも地震がありました。

地質的な面から見れば、自然は未だに新しいバランスのとり方を探しているようです。しかし社会的な面から見れば、人々は「これは『自然からの警告』に違はなく、私たちはこれに応じて日々の生活を見直さなければならない」とも思っています。大きな災害はまだ続いているようです。最近ではロンボク島、スラウェシ島のバル、スンダ海峡のアナク・クラカタウ山の噴火がありました。

The EQ in Lombok attracted the attention due to 'different' pattern of the tremor, which is usually the magnitude getting weaker and weaker after the main shock. In Lombok the after-shock getting stronger that made the impact so bad. The building which resist on the early shocks could not survive anymore on the following even stronger shocks. Lombok island only has one main road as the vital back bone for transportation. And it is also made other difficulties to reach the affected remote area. The reconstruction process rather slowly progressing due to different perception of the local people which prefer timber structure while the government prefer a reinforce concrete structure. There is also the gap on the skill level that most of the villagers are not familiar with the prefabricated reinforce concrete construction. Training and workshop might be the option but will take a longer time.

Palu EQ was predicted before by geo expert few years back. But it seems that this information was kept in order not causing panic on the public life. Then it was really happen with devastating impact . Palu area topography and soil condition made the impact very severe, the tsunami was occurred which was not predicted for the raising wave on the open sea relatively low, but when it entered the inland channel was very high and strong. In some area the liquefaction also happened, the phenomena never thought of before. Through this disaster then people remember, the memory recall again about the old story of that area. It was the story about tsunami and also liquefaction mentioned in the old folklore, even mentioning about the topo name of the area which mean ' land disappeared down'.

The knowledge as well as awareness about the potential disaster is very important. It should be part of the education system in general. The practical knowledge about saver building construction is very significant. Maybe the built sample of building construction is needed. The people need to know and can be involved in the spatial planning decision as well as in building construction possibilities.

Eko Prawoto- Architect/Lecturer Duta Wacana Christian University
April 12,2019



打合せの様子（中央がエコさん）

ロンボク島の地震は、揺れ方のパターンが通常と違ったことから関心を集めました。通常、マグニチュードは本震の後弱まっています。しかしロンボク島では余震がますます強くなって、そのことが大きな悪影響をもたらしました。はじめの揺れに耐えた建物も、その後のさらに強い揺れには持ちこたえることができませんでした。ロンボク島には、交通の要となっているメインの道路が一つしかありません。このことも、離れた被災地域へのアクセスにおいて困難をもたらしました。現地住民と政府の認識の違いから、再建プロセスはゆっくりと進んでいます。住民が竹製の建物を好むのに対して、政府は鉄筋コンクリート製の建物を推奨しています。また、技術レベルにもギャップがあります。住民の多くはユニット式の鉄筋コンクリート建築に慣れていません。トレーニングやワークショップを行うのも手ですが、長い時間がかかるでしょう。

パルの地震は数年前から専門家によって予想されていました。しかしこの情報は、公共生活に混乱を生じさせないために公表されていませんでした。そして、それは現実には起こり、甚大な被害をもたらしました。パル地域の地形と地質の条件が、被害を深刻化させました。津波が起きましたが、津波高は外海では比較的低かったのが、内陸の水路に入ると非常に高く、強くなりました。これは予想されていませんでした。液状化が起きた地域もありました。これは、これまで考えられもしなかった現象です。この災害を通して、人々はその地域の昔話の記憶を再び思い出しました。それは古い言い伝えの中で言われている津波や液状化についての話です。話の中では、「沈没して消えてしまった土地」を意味する「トポ」という地域の名前についても言われています。

将来起こりうる災害に対して、意識だけでなく、知識がとても大切です。このことは一般的に教育システムの一部になるべきだと思います。より安価な建築に関する実践的な知識が非常に重要です。おそらく建物のモデルハウスが必要でしょう。人々は建物を建てるだけでなく、空間プランニングの決定についても知る必要があります。そこに参加することができます。

2019 年 4 月 12 日
エコ・プラワット 建築家／デュタ・ワチャナキリスト教大学

(訳：立部知保里)

■ ロンボク島地震救援プロジェクト

住民に木造建築の理解を！

地震の被災地はロンボク島北部全体に広がっており、レンガ造りの家屋の多くが倒壊した一方で、多くの伝統的な木造家屋は地震を耐え抜いていました。そのため、地震前は木造住宅は貧しいイメージがあり避けられてきましたが、地震後には住民の中では木造建築で新しい家を作りたいという考えが広がっています。多くの住宅が倒壊した中でも住民は「ゴトンロヨン」（相互扶助）の精神とともに、助け合いながら生活、再建しようとしています。



被災した家屋

CODE の動きと支援

CODE は発災直後から情報収集を行ってききましたが、10月29日～11月5日までスタッフを派遣し、被災地の調査、建築家エコ・ブラワットさん（デュタ・ワチャナキリスト教大学）との今後の方針の話し合い、支援地域の確認を行いました。調査で訪れたロンボク島北部ジェングラン村リアス地区で、住民からエコさんに「木造の家をデザインしてほしい」という声が上がりました。そこで CODE はジェングラン村で家のデザインの提供と木造建築の意味、地域の生活デザイン、日本の経験を伝えるワークショップを行うことを決定しました。



ロンボク島の伝統的な木造家屋

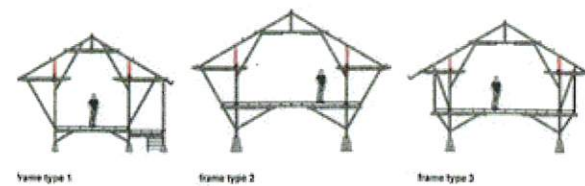
概要

発生日時・規模：2018年7月29日（M6.4）、
8月5日（M6.9）、
8月19日（M6.3）（M6.9）
※4度のM6.0以上の地震が発生しました。
被災地：ロンボク島北部地域
被害：死者555人 負傷者7,757人 被災者約35万人
被害家屋7万4,000棟（インドネシア国家防災庁発表）



ゴトンロヨンでモスクを再建

その後、エコさんよりデザインが提案され、ロンボク島への派遣にも同行していただいた建築家の北茂紀さん（北茂紀建築構造事務所）のアドバイスを基に村に提供する木造建築の図面が完成しました。さらに現地住民からの意見、要望を集めて図面をより村の生活に合ったものにアレンジをしています。また、図面の完成後、住民参加のワークショップを行う予定です。今、住民に木造建築が注目されているのは木造建築が地震に耐えたことによるものです。この機会に、なぜ木造の家が地震に強いのか、伝統木造の家を長く使うためのメンテナンス方法など住民がしっかり理解していく必要があります。また、家で生活する女性や子どもなども含め、生活の課題を掘り下げ、より住みよい住宅を再建できるようにします。このワークショップで、地震後一時的に注目されている木造建築に対して地域住民が理解を深めます。（上野智彦）



エコさんの木造家屋デザイン

■ スラウェシ島地震救援プロジェクト

伝統建築で子ども達の居場所を！

2018年9月、インドネシアのスラウェシ島でM7.5の地震が発生しました。被害は、地震による家屋倒壊だけではなく、地震で海底地滑りを起こしたことや津波が来襲したこと、そして内陸で起きた地盤沈下による液状化などで甚大な被害を出しました。



液状化の被災地

CODE の動きと支援

2018年11月と2019年1月に二度スタッフをスラウェシ島の被災地パルに派遣し、被災地パルの建築家ラーマットさんたちと現地視察や協議を行いました。その結果、CODE はラーマットさん達が行っている伝統木造建築を活かした仮設住宅やコミュニティスペースの再建を支援することになりました。

この建築は、「Tambi」や「Bantaya」と呼ばれ、山岳民カイリ族などが伝統的に継承してきた構法で、木や竹を組み合わせた日本の軸組構法と同様のものです。ラーマットさんは、「伝統建築は、免震で地震にも強く、安価で、涼しく過ごしやすい」といいます。

建設予定地は、ランガレスという集落で、隣接するジョノオゲという大規模な液状化で故郷を失った人たちの移転してきた場所です。この伝統建築で建てられたコミュニティスペースは、移転してきたジョノオゲの子どもたちと地元のランガレスの子どもたちが、歌や踊り、読み書きを行う交流の場として活用されます。（吉椿雅道）



建設予定地（ランガレス村）



伝統建築 Bantaya

概要

発生日時：2018年9月28日 18:02（現地時間）
震源：インドネシア・スラウェシ島
中スラウェシ州パル市の北約78km
規模：M7.5 深さ：10km
被災地：中スラウェシ州 州都パル市（人口約35万人）
ドンガラ県（人口約28万人）
被害：死者2,115人 負傷者4,438人
行方不明者1,309人（5,000人との情報も）
避難者：22万3,751人 家屋被害6万8,451棟
（10/26 インドネシア国家防災庁発表）

■ スンダ海峡火山津波救援プロジェクト

共に学び合う場を！

2018 年末、インドネシアで再び災害が起きました。スンダ海峡にある火山島が噴火し、山体崩壊で崩落した大量の土砂が津波を引き起こしました。地震のような揺れや音もなく襲ってきた津波は、現地では「サイレント津波」と呼ばれ、不意を突かれたことからジャワ西部やスマトラ島南部で大きな被害が出ました。日本でも 1792 年に長崎県の島原半島の眉山が噴火した事で、対岸の熊本県天草に津波が襲い、約 1,500 名が亡くなり、「島原大変、肥後迷惑」と言われています。



バンテン州の被災地の様子



スマールの被災した漁港

CODE の動きと支援

CODE は、長年連携しているエコ・ブラワットさんに紹介していただいたインドネシア建築家協会のマスチャヒオさんたちの案内で 2019 年 1 月末、ジャワ島西部の被災地を視察しました。

被災地では、海岸線から内陸 100m を居住禁止区域にしており、高台の仮設住宅で暮らす住民もいますが、依然として海岸線で暮らす漁民も少なくありません。漁民の暮らしと津波から命を守ることの折り合いが求められています。また、サイレント津波に対してどのように避難をし、命を守るのか今後の重要な課題になっています。

上記のような津波防災対策や復興における移転や居住の問題は、東日本大震災を経験した日本も同様の問題を抱えています。マスチャヒオさんたちは、エコ・アプローチという表現を使い、なるべく生態圏を破壊しないような防災・減災の手法を模索していることから、日本とインドネシアで災害における経験や知恵、失敗を学び合う必要があります。(吉椿雅道)



バンテン州の被災した家屋



すべて竹で作った仮設住宅（モデルハウス）

概要

日時：2018 年 12 月 22 日 21:27 (現地時間)

場所：スンダ海峡の火山島アナク・クラカタウ山の噴火による津波

被害：死者 426 名 負傷者 7,202 名

行方不明 29 名

避難者 43,386 名 損壊家屋 1,527 棟

(12/29 インドネシア国家防災庁発表)

通年型インターンシップを経験して感じたこと

～高校生が CODE で働いてみて～

神港橘高校 3 年 山内 優
(2019 年 4 月より関西大学)

私が CODE でインターンを経験することになったきっかけ

私は、高校 3 年生での選択科目でキャリア実践という 1 年を通して地域の団体や会社で実際にインターンとして職業体験ができるプログラムにすごく興味があり、先生と相談して海外や英語について興味があった私は CODE でお世話になることが決まりました。

高校 2 年生の時にタウンミーティングという学校に地域の会社や団体・大学生が来て仕事のやりがいなどについてお話していただくイベントがあり、その時にも吉椿さんのお話を聴きました。そのときにすごく印象に残っていたので決まった時は 1 年間の限りある時間を大切に頑張ろうと思いました。



インターンの意気込みを語る山内さん

インターンシップ最終日 ～感じたこと～

私は 1 週間に 1 度学校には行かず直接 CODE に向かい実習を 1 年間体験するプログラムに参加して今日は最後の日になりました。

最初は、友達と誰にも会わず一人で行くのは緊張や不安でいっぱいでしたが、何度か経験していくうちに、英語や海外のことだけでなく CODE の活動や災害・防災についても興味を持って取り組むことが出来ました。

実習時には、主に「食と国際協力」のチラシ作りやホームページの翻訳などの作業を担当していました。地域の方も見るチラシを作るのはデザインやどうやったら 1 枚のチラシでうまく内容を伝えて興味を持ってもらえるのだろうか。などすごく悩みました。

ホームページの翻訳では人生で初めて長い文の翻訳をさせてもらいました。単語 1 つにいろんな意味があつてすごく難しく、時間をかけてしまいましたが興味のある英語に触れてまだまだ語学力が足りないことを痛感しました。また、世界に発信することの意味なども実際に翻訳を通して学びました。

実習時間のほかにも「食と国際協力」のイベントや防災の勉強をしながら山登りをしたりいろんなイベントに参加しました。



CODE や災害支援について紹介する山内さん

夏休みには、人生初の岡山県へ西日本豪雨のボランティアに参加しました。小学生のころから阪神・淡路大震災など災害について勉強してきました。どんな災害でも動画や写真でしか見たことがありませんでしたが実際にボランティアとして被災地に行き自分の目で見ると思っていたよりもひどく衝撃を受けました。また、今まで私は災害を甘く見ていたように思い、実際に自分の目で見ることはどんな教科書よりも勉強になるなと感じました。

最後に

高校生のうちにインターンシップを経験できる人はすくないと思います。CODE に来てから学校では経験できなかったさんのことを体験し、たくさんの人に出会いました。イベントなどで出会う方々のお話を聞くのはすごく刺激的で自分の視野が広がる貴重な時間となりました。

ラストを迎えて感じたことは何より「感謝」の気持ちです。CODE でいろいろな体験をさせてもらったことに感謝の気持ちはもちろん、改めて両親に感謝しないといけないなと思いました。私はこれから高校卒業後、CODE で学んだことを活かし、より深く勉強できるように大学へ進学します。インターンシップとしての実習は終わりますがこれからも CODE でたくさんお世話になると思います。中国の四川省に行く計画を立てていたり、ずっと憧れていた海外に人生で初めて行ける日が近づいてきたように感じます。

親への感謝、このインターンシップに参加し色々なことを勉強させてもらったことへの感謝の気持ちを忘れずにこれからもたくさんの方に挑戦し、頑張っていきたいです。

※山内さんは 2019 年 3 月、第 5 回日中 NGO ボランティア研修交流に参加して四川省を訪れました。



広島で国内研修を行いました

日程：2018年11月24日～25日（24日は前泊）

場所：広島県安芸郡坂町平成ヶ浜仮設住宅

参加者：立浪雅美（2016年後期フィールドワーク企画）、高橋大希（2017年後期インターン）、
頃安祐菜（神戸学院大学）、金澤諒平（神戸学院大学）、太田伸弥（神戸学院大学）、
内藤悠（兵庫県立大学大学院）

同行・増島智子（被災地 NGO 協働センター）、上野智彦

目的：災害救援の活動に触れることで、若者が被災地への支援活動に目を向ける。

なぜ国内研修を実施したのか？

CODE 未来基金は、これまで海外の研修やインターンシップを通じて若者が NGO に関わる機会を創ってきました。その中で海外ではハードルが高いけれど国内ならと考える方や海外の被災地で学んできたけど国内の被災地にも訪れることができればという若者の言葉から、まさに目の前の被災地である平成 30 年 7 月豪雨の被災地にて国内研修を行うことになりました。今回の研修では被災地 NGO 協働センターの協力を得て、広島県坂町の仮設住宅を訪れ、ボランティア活動を通じて被災地での活動について学びました。（上野智彦）

ようようバック配布とご用聞き

仮設住宅に住む被災者の方に「ようようバック」（ラップや衛生用品、防虫用品などの支援物資詰め合わせ。「ようよう」とは、坂町の方言で「ありがとう」の意）を配りながら各家の困りごとや現状を聞いて回りました。最初は参加者が仮設住宅の方々とのように話したらいいのか戸惑っており、物資を渡すだけになってしまうことも多かったのですが、次第に住民とコミュニケーションを取れるようになっていきました。1 人の若者は「じっくりお話ししたいのかとも思ったが、楽しそうにお話をする住民の方と自然に世間話をするのができた。」と言います。

足湯と喫茶

平成ヶ浜仮設住宅の集会所にスペースを設け、足湯を行いました。若者たちは被災した方と直接話すことで、一人ひとりの「つぶやき」（被災者の生の声）に向き合いました。今回は 20 名ほどの方にお越しいただき、足湯や若者との語り合いを楽しんでいる様子でした。ある若者は「これまでもボランティアに参加したけれど、作業だけではなく被災者と直接話し、笑うことが大切だと実感した。」と感想を述べました。また、足湯と並行して隣のスペースで喫茶を実施しました。喫茶は福岡から来たボランティアグループが実施しており、コーヒーやお菓子を手に被災者と語り合いました。



仮設住宅を訪問する



お茶会と足湯



写真：報告会の様子

2018 年度 CODE 未来基金報告会

3 月 30 日（土）、神戸市青少年会館にて「2018 年度 CODE 未来基金報告会」を開催しました。当日は約 40 名の方にご参加いただきました。

フィリピンでのフィールドワークに参加した羽田和真さん、半年間のインターンを経験した高橋大希さん、平成 30 年 7 月豪雨で被災した広島県坂町を訪問したスタッフの上野、日中 NGO ボランティア研修交流事業で中国四川省を訪れた曾翕如さん、成安有希さん、西岡かりんさん、原田梨央さん、森口花さん、柳瀬彩花さん、山内優さんが、それぞれの活動での学びや感じたこと、現在の取り組みなどについてお話ししました。

『支援』というよりは、友人・遠い親戚が困っているから助けるという感覚が自分には合っている」「被災地で無力な自分を痛感した。自分に力をつけるために、今自分なりにできることを考えて取り組んでいる」「現地に行き行って感じることや初めて分かることが大きい」「言葉が通じなくても心を通わすことができた感動／言葉が通じないことで相手を深く理解できないもどかしさ」「仲間の言葉のおかげで自分の弱い部分だと思っていたことを肯定的にとらえられるようになった」など、さまざまな葛藤の中で現場や自分自身と向き合った若者たちの、まっすぐな言葉たちが印象的でした。

後半は参加者全員で車座になり、現地で自分たちが感じたことをどのように伝えていくか、阪神・淡路大震災から 24 年が経つ中で感じる「伝えること」の難しさ、これまで海外の被災地を訪れた参加者が感じたこと、若者を海外へ送り出した大人たちの想いなどについて話し合いました。若者の発表を聞いた大人たちもまた、新しい気付きやパワーをもらっていたようでした。現場に行き行ってそこで出会う人たちとつながること。自分の経験を伝えることでまた誰かとつながること。CODE が大切にしてきたつながりを感じられた報告会でした。

（立部知保里）

報告会に参加した方の声

・何度も繰り返し登場した「現場に行く大切さ」、その現場に関わり続けてきた人と一緒に行くことが大切だとあらためて感じました。また未来基金のプログラムが積み重ねられることで、若い世代の中でのバトンリレーも起きつつあるんだなと思いました。

（30 代・男性）

・未来を担う若い人たちが CODE のプログラムを通して経験したことを伝えることで、また誰かの心につながると再確認しました。このプログラムを支える大人の環がさらに広がりますように。

（50 代・女性）



モンゴル国（内蒙古自治区）

面積	日本の約4倍
人口	324万人 (内蒙古自治区400万人)
首都	ウランバートル
民族	モンゴル人(95%)
言語	モンゴル語、カザフ語
宗教	チベット仏教など
主要産業	鉱業、牧畜業、 流通業、軽工業
通貨	トグログ



第46回 11月15日 世界で最も島の多い国インドネシア ～災害の多い祖国への想い～

第46回のテーマはインドネシアです。2018年はロンボク島地震、スラウェシ島地震津波、会の時点ではまだ発生していなかったスンダ海峡火山津波などインドネシアにとっても災害の年となりました。今回の語り手はインドネシア人留学生のChelia Pratiwiさんです。インドネシアではスマトラ島地震津波をはじめ地震を何度も経験したそうです。インドネシアではオランダなどに統治されていた時代には食べることに困ることもありましたが、戦後、インドネシアの経済は改善が続けられました。一方、現在では気候変動で農業状況が変化し、米などは海外からの輸入に頼ることも多いそうです。

肉団子のスープや激辛サラダ、ナシゴレン、今回の食でもある串焼きサティなどインドネシア料理やマナーはシルクロード行路やイスラム教から大きな影響を受けたそうです。鶏肉のサティは甘い味付けがされたソースとともにいただきました。



インドネシア料理・サティ

然に在るものとともに生きている様子です。またモンゴルとは切り離された内蒙古自治区の想いについても語られました。

今回の食、「ボーズ」は肉をたっぷり使った肉まんのような料理で、今回は羊肉ではなく牛肉を使用して作りました。香辛料とジューシーな肉で滋養強壮効果もあるようで、病気の時にも食べられるそうです。



モンゴル料理・ボーズ

インドネシア共和国

面積	日本の約5倍
人口	約2.55億人
首都	ジャカルタ
民族	マレー人(その他ジャワ、スンダなど約300の民族)
言語	インドネシア語
宗教	イスラム教(87%)、キリスト教(10%)、ヒンズー教、仏教など
主要産業	製造業、農業、観光、鉱業など
通貨	インドネシアルピア



セネガル共和国

面積	日本の約半分
人口	1541万人
首都	ダカール
民族	ウォロフ、プルなど
言語	フランス語、ウォロフ語など
宗教	イスラム教(95%)
主要産業	農業、漁業
通貨	CFAフラン



第48回 2月22日 チベット高原から ～標高4000mの暮らしから見えるもの～

第48回のテーマは、2010年4月、大きな地震が襲いCODEが救援プロジェクトを立ち上げた青海省を含む、「チベット」です。語り手は青海省のプロジェクト以外にもチベット文化圏を何度も現地を訪れている吉椿CODE事務局長です。西寧からバスで18時間、青海省・玉樹Lab村でCODEはヤク銀行プロジェクトを実施しています。毛が長いチベット特有の牛「ヤク」37頭を遊牧民に提供し、現在は約60頭に増えています。今回の食と国際協力では、国をまたいだチベット文化圏国や仏教の歩んできた歴史や独特の高原文化について語っていただき、切っても切り離せない中国との関係や歌舞やホースレース、チベット暦などが紹介されました。

今回の食はチベットの麺料理、トゥクパです。具沢山のチベットのうどんは本来であればヤクのバターを乗せて食べるようです。



チベット料理・トゥクパ



会の様子

第47回 12月20日 セネガルの人々と共に歩んだ2年間の記録 ～今、伝えたいこと～

第47回のテーマはセネガルです。過去、CODEはセネガルで災害救援を行ったことはありませんが、今回は特別編として開催しました。語り手はセネガルで青年海外協力隊として活動された柚原里香さんです。今回は、柚原さんがセネガルを訪れた2年間の活動について語っていただきました。

世界で起こる問題に対して何かできることがないかと思う中で現地への想いが膨らみ、青年海外協力隊に参加することになりました。セネガルでは子どもたちとの運動会や障がい児とのクリスマス会、手洗いの普及活動などに尽力していました。体調トラブルなどもあったようですが、ゆっくりと木の下でお茶を飲む、日本とは違うセネガルの時間の流れが好きだった、

セネガルの人は今を生きていると語ります。また最後に今回一番伝えなかったこととして「優しい人になろう」ということを上げました。人に、自然に、自分に優しくなれたら世界が変わると柚原さんは語ります。今回の食は、セネガルで伝統的に食べられるチェブジェンという炊き込みご飯のような料理です。魚と野菜、油を使い、食べ応えのある料理となっています。魚の風味がよく出ておりとても美味しく仕上がっていました。



セネガル料理・チェブジェン

チベット

(中国、ネパール、ブータンを含む)

面積	日本の約6倍
人口	600万人(中国国内)
首府	ラサ
民族	チベット族
言語	チベット語、中国語
宗教	チベット仏教
主要産業	農業、牧畜業、鉱業
通貨	人民元



プロジェクトレポート



左：先生と地元農家から農作業を学ぶ
右：アニス校長と生徒たち

ハイチ地震救援プロジェクト報告：ハイチの農業技術学校は今

ハイチ地震（2010年1月12日）

2010年1月、中米ハイチをM7.0の地震が襲いました。死者22万人、総被災者約350万人という甚大な被害が人々を苦しめました。ハイチは被災以前から極度の貧困に悩まされており、このハイチ地震によってハイチの人々はより厳しい状況へと追い込まれています。

CODEの支援

CODEは発災直後からメキシコ在住のカウンターパートのクワテモックさんを派遣し子ども支援や医療物資提供を行う他、現地NGO・ACSISを通じた女性へのマイクロファイナンス支援などを行いました。その後、当時ハイチで活動されていたクロストロア宣教修道女会のシスター須藤昭子さんや、シスターが立ち上げ、植林や農業指導を行うNGO・GEDDHとともに農業技術学校の建設支援を開始しました。

農業技術学校ETAL

2019年3月、これまでのハイチ地震救援活動でも協働している災害看護支援機構（DNSO）のメンバーとともにスタッフの上野がハイチを訪

れ、農業技術学校ETALの最終モニタリングを行いました。農業技術学校ETALは首都ポルトープランスから車で2時間ほどのレオガンに位置しています。CODEやGEDDH、カナダの農業の専門家ら顧問会のサポートで2014年からスタートし、CODEの支援で建設された校舎は2015年に完成し、活用されています。

今回の派遣では始動から4年が経過したETALの現状を視察しました。ETALは現在2学年19名（1年生11名、2年生8名）の学生が在籍しており、日々農業を学んでいます。中には学生は遠いところでは車で2時間半以上かかる距離を登校する生徒もいます。また現在、教師は3人体制で、1名が実地授業の講師、2名が座学を担当しています。

授業では農業の基礎の他、環境配慮や農産物の販売、家畜飼育なども学んでいます。現在ETALでは家畜を飼っていませんが、地域で養鶏をやっている農家に協力していただきながら飼育、鶏卵の販売などを学んでいます。その他にも肥料や畑の土の作り方など近隣のベテラン農家の方に指導いただくなど、地域の方々とともに学びの場を形成しています。また、これ

までの卒業生20名はそれぞれの地元に戻り、近隣の農家にETALで学んだことを教えているようです。

今回案内していただいたアニス神父は昨年10月にETALの校長になりました。アニス校長は、「校長になったからには生徒を増やし、ETALを成長させていきたい」と意気込んでいます。

ETALの課題

農業技術学校として歩み始めたETALですが、未だ多くの課題が残されています。財政状況は十分ではなく、長靴など授業に使う備品が足りないことは生徒や教師から学校への要望として挙がっています。また電気や水道の工事も終わっていないため、座学の授業はCCFPLの校舎を使用しています。またアニス校長は、「今後卒業生に教師としてETALをサポートしてもらうことは考えている」と言います。今後ETALはこれらの課題を一つひとつ乗り越えていきます。

CODEは今回のモニタリングを最後にハイチ地震救援プロジェクトを終了しました。本プロジェクトはこれまで多くの方に支えられて実施してきました。厚く御礼申し上げます。（上野智彦）



ETAL校舎と敷地内の農場を視察



学校の状況をヒアリング



先生、生徒と記念撮影

会員・寄付者ご芳名（50音順、敬称略）2018/9/1～2019/4/15

賛助会員

新雅彦、及川和子、黄貞順、大牟田智佐子、岡田雅幸、岡本誠、岡本善弘、北川昭二、小林アイ子、坂戸勝、空野仁志、竹代一洋、旦保立子、土屋佳代、土屋芳久、鄭恵姫、永松伸吾、野間ひとみ、半田裕子、福井敬朗、水平企、道場晴佳、目黒和子、山本佳子、山本良治、吉永孝代

ご寄付

新井場公德、新雅彦、市橋純子、井奥眞貴子、今山朝枝、植田麻紀、宇田川規夫、大阪聖ヨハネ教会、岡部徹、岡本善弘、春日千明、加藤清、軽込郁、岸野春子、北浦和志、木村如子、黒朱美、コープ神戸ユニオン、小林アイ子、斉藤茂樹、坂戸勝、新保風子、杉田文夫、住野和子、高田秀峰、高橋一夫・朋世、高橋大希、旦保立子、陳佳子、塚本謙三、鄭恵姫、富田五男、中川和之、中川寿子、中里一実、永松伸吾、中村覚、中村佳代子、中山圭子、日本聖公会大阪教区川口基督教会、野崎隆一、野間ひとみ、畑中裕子、花田知佳、林ひさ子、林万平、板東悦子、日比野恵子、兵庫県尼崎小田高等学校、平川章子、平澤重子、福岡良樹、福住彬、株式会社プロテックエンジニアリング、マエダマドカ、三浦真里子、水野明代、水平企、道根瑠璃子、有限会社村井新聞店、目黒和子、柳瀬里佳子、山崎清、吉田節子、吉野恵子、ワキタマサシ、和田幹司

イベント情報

CODEのタベ2019～楽しい食事と報告会～

CODEは毎年6月に「CODEのタベ～楽しい食事と報告会～」を開催し、会員、寄付者や関係者の皆様と交流する機会を設けております。今年もCODEを支えていただいている皆様との交流の他、最新のCODEの情報やCODEに関わる若者の声をお届けさせていただきます。どなたでもご参加いただけますので、ぜひお気軽にご参加ください。

日 時：2019年6月8日（土）18:30～21:00
場 所：兵庫県民会館7階「鶴」
内 容：・進行中のプロジェクトの報告
・若者によるCODE未来基金プログラムの報告 など
会 費：大人3500円 学生2000円（食事・ドリンク付）



CODEのタベの様子

月イチ★シリーズ 食と国際協力

CODEは毎月一回“食”を通して世界の国々の文化や暮らしについて学ぶ場をつくっています。“食”を通して世界の様々な国について知ることで、いざ災害が起きた時に『どこか遠くの出来事』ではなく少しでも『身近な出来事』として感じられればという思いで開催しています。毎月のテーマの国の料理を食べながらまったりと、その国の文化に思いを馳せます。

☆これまで毎月第3木曜日に開催してきましたが、今年度は第3金曜日に開催する予定です！



食と国際協力の様子

スタッフ活動記録・今後の予定

活動記録

2018年

9/18	関西国際大学「サービスマーケティング」で講義(吉椿)
	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事)
9/19	たつの揖保川ボランティア協会「揖保川ボランティアの集い」で講演(吉椿)
9/21	SDGs-DAYネットミーティングに参加(上野)
9/25	NGOことはじめ基礎編(榛木理事)
	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事)
9/28	JICA草の根技術協力事業フィリピン派遣報告(吉椿)
10/1	舞子高校環境防災科で講義(吉椿)
10/2	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事)
10/4	関西NGO協議会理事会に出席(吉椿)
	CSネットワークフォーラムに出席(上野)
10/9	コープこうべハート基金運営委員会で報告(吉椿)
	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事)
10/16	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(吉椿、上野)
10/18	第45回食と国際協力「モンゴル」を開催(アラタンサン、佳子さん夫妻)
10/23	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事、上野)
10/25	NGOことはじめ実践編(村井理事)
10/27	KANSAI-SDGs市民アジェンダ第2回分科会で講義(吉椿)
10/29	インドネシア・ロンボク島第1次派遣(増島、上野)
10/30	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(吉椿)
10/31	近畿ろうきん尼崎支店で講演(吉椿)
11/5	近畿ろうきん姫路支店で講演(吉椿)
11/6	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(吉椿)
11/7~12	インドネシア・スラウェシ島第1次派遣(吉椿)
11/13	近畿ろうきん北播支店(丹波)で講演(吉椿)
	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事)
11/15	ひょうご安全の日総会に出席(吉椿)
	第46回食と国際協力「インドネシア」を開催(チェリアさん)
11/17	大阪大学公開講座「助ける」で講演(吉椿)
	CODE未来基金国内研修の事前下見(上野)
11/18	近畿ろうきんと生協祭でブース出展(上野、羽田、柳瀬、原田、吉椿)
11/19	近畿ろうきん但馬支店(養父)で講演(吉椿)
	インドネシア・ロンボク島地震、スラウェシ島地震津波報告会(上野、吉椿)
	平成30年度中南米災害医療マネジメント研修(兵庫県災害医療センター、村井理事)
11/20	KANSAI-SDGs市民アジェンダミーティング(吉椿)
	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(齊藤容子さん)
11/21	PHD協会研修生へ講義(吉椿)
11/24	CODE未来基金国内研修(増島、上野)
11/25	関西国際大学サービスマーケティング「三木市青山地区防災訓練」に参加(吉椿)
11/27	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事)
11/29	近畿ろうきん明石支店研修で講演(吉椿)
11/30	大阪大谷大学人間社会学部「国際協力論B」で講義(吉椿)
12/3	大阪大学「地域創生論Ⅱ」で講義(吉椿)
12/4	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事)
12/4~9	兵庫県立大学四川大地震視察のアテンド(吉椿)
12/6	近畿ろうきん神戸支店で講演(上野)
	関西学院大学人間福祉学部社会起業特論C(村井理事)
12/8	KANSAI-SDGs市民アジェンダ第3回分科会に参加(上野)
12/11	神港橋高校タウンミーティングで講演(吉椿)
	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(吉椿)
12/15	SDGs-DAYイベントに参加(上野)
12/17	関西国際大学「セーフティマネジメント国際防災協力」で講義(吉椿)
	CODE未来基金選考委員会(芹田代表、榛木理事、松田理事、西海さん、上野)
12/18	神戸学院大学現代社会学部「社会防災特別講義Ⅱ」で講義(村井理事)
12/19	CODE理事会
12/20	第47回食と国際協力「番外編セネガル」(柚原里香さん)
12/21	ユナイテッドアースボランティア報告会に参加(上野)
12/23	青島地震局訪日団へ講演(吉椿)
12/24	ワンワールドフェスタforYouthで講演(吉椿)
	ワンワールドフェスタforYouthでブース出展(吉椿、上野、新保、柳瀬、山内)

2019年

1/6	関西学院大学ハーバード大学交流事業にブース出展(上野)
1/8	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「課題と展望」で講義(村井理事)
1/9	龍谷大学「国際NGO論」で講義(吉椿)
1/11	神戸工科高校「市民専門講師授業」で講義(上野)
1/15	神戸工科高校「市民専門講師授業」で講義(上野)
1/16	関西NGO協議会理事会に出席(吉椿)
	神戸工科高校「市民専門講師授業」で講義(上野)
1/18	兵庫県立大学台湾シンポジウムに参加(吉椿)
1/20	チームひょうご報告会で報告(吉椿)
1/22~30	第2次スラウェシ島派遣&第1次スンダ海峡派遣(吉椿)
1/23	神戸マラソンフレンドシップバンク報告会で活動報告(上野)
1/25	近畿ろうきん伊丹支店で講演(上野)
2/1	北須磨高校で講演(吉椿)
2/7	近畿ろうきん西宮支店で講演(吉椿)
2/9	KANSAI-SDGs市民アジェンダ第5回分科会に参加(吉椿、上野)
2/13	兵庫県立大学減災復興国際シンポジウム(インドネシア)に参加(吉椿)
2/15	阪神・淡路大震災25年に向けて(被災地NGO協働センター主催)のミーティングに参加(村井理事、吉椿、上野)
2/16	近畿ろうきん神戸支店で講演(上野)
2/17	コープふれあいのまつりin兵庫でれーずんを販売(上野)
2/18	CODE理事会
2/21	近畿ろうきん洲本支店講演(吉椿)
	関西NGO協議会理事会に出席(吉椿)
2/22	第48回食と国際協力(チベット)で講師(吉椿)
2/25	近畿ろうきん神戸支店で講演(吉椿)
2/26	近畿ろうきん(パナソニック三田)で講演(吉椿)
2/28	未来基金選考委員会
3/14	るーぷらざ(河内長野)で講演(吉椿)
	第49回食と国際協力(イラン)を開催(奥圭三、ナヒドさん夫妻)
3/18~24	第5回日中NGOボランティア研修交流事業に同行(吉椿)
3/24~29	龍谷大学の石原凌河准教授の四川視察のアテンド(吉椿)
3/30	CODE未来基金活動報告会に参加(芹田代表、室崎副代表、村井理事、村上理事、細川、増島、吉椿、上野)
4/1	未来基金インターン立部知保里さん仕事初め
4/5	Kansai-SDGs市民アジェンダ第7回分科会に参加(吉椿)
4/17	CODE理事会
4/18	第50回食と国際協力(ハイチ)で講師
4/19	COMING KOBE企画ミーティング(被災地NGO協働センターとコラボ)(上野、立部)
4/22	阪神・淡路大震災25年ミーティング(被災地NGO協働センター主催)に参加(吉椿、上野、立部)
4/26	COMING KOBE出店者説明会に参加(被災地NGO協働センターとコラボ)(立部)

今後の予定

5/9	関西NGO協議会理事会に出席(吉椿)
5/11	COMING KOBEにブース出展(被災地NGO協働センターとコラボ)(立部)
5/10	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義(上野)
5/15	CODEボランティアの日
5/17	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義(村井)
	第51回食と国際協力(フィリピン)で講師(立部)
5/24	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義(村井)
5/26	関西NGO協議会総会に出席(吉椿)
5/31	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義(村井)
6/4	龍谷大学政策学部で講義(吉椿)
6/7	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義(村井)
6/8	CODE理事会・総会・CODEのタベ
6/14	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義(村井)
6/18~23	中日防災安全研修(四川省成都市)で講義(吉椿)
6/21	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義(村井)
6/28	神戸女子大学国際ボランティア活動論で講義(村井)
6/29	神戸学院大学社会貢献学入門で講義(吉椿)

活動へのご協力をお願いいたします

ご寄付のお願い

CODE の活動を継続するために皆さまのご寄付を募っています。救援プロジェクトへのご寄付は 25% を上限として CODE の管理運営費に使わせていただいております。ご協力をお願いいたします。

【郵便振替】

加入者名:CODE
口座番号:00930-0-330579

入会のお願い

私たちとともに CODE の活動を担っていく会員を募集しています。

【賛助会員】

個人・学生： 年会費 2,000 円×1 口以上
NPO/NGO： 年会費 2,000 円×1 口以上
企業・団体： 年会費 10,000 円×1 口以上
ほか、正会員をご希望の場合は事務局までお問合せください。

【銀行振替】

ゆうちょ銀行
支店名:〇九九店(ゼロキュウキュウ)
支店番号:099
預金種類:当座
口座番号:0330579
加入者名:CODE

講演会・報告会派遣

講演会、報告会を開催してみませんか？あなたの住んでいる地域で開催される講演会に CODE のスタッフを講師として派遣します。お気軽にお問合せください。

ボランティア募集

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などのボランティアを募集しています。

CODE とは？

1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災で、KOBÉ（阪神・淡路大震災のすべての被災地を指します）は世界 70 余りの国々から支援を受けました。その後「困ったときはお互い様」の想いから、世界各地の災害を支援しようと市民による救援活動が活発化してきました。

KOBÉ の経験と知見を活かし、幅広い智恵や能力をもつ企業、行政、国際機関、研究機関、NGO などを含めた市民の集まる場として 2002 年 1 月 17 日に NPO 法人として発足したのが CODE 海外災害援助市民センターです。

CODE は前身となる阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議の時期も含め、これまで 62 回の救援活動を行ってきました。「最後のひとりまで」の理念を胸に、「寄り添いからつながりへ」人間復興となる救援を実践しています。

CODE の活動とは？

CODE は 2019 年 4 月現在、アフガニスタン、中国・四川省、青海省、フィリピン、ネパール、インドネシアでの救援プロジェクトを実施しています。ネパールでの耐震住宅再建プロジェクトやアフガニスタンでのぶどうプロジェクトなど、長い目で見た支援を「最後のひとりまで」という理念を持って KOBÉ から世界の被災地へとどけています。

また、CODE の活動を未来へつなげるために「CODE 未来基金」を立ち上げ、若手 NGO スタッフやこれから国際協力や災害支援を志す若者をサポートしています。未来基金を通じて若者が NGO で働くことができる社会を創っていきます。

発行元

(特活) CODE 海外災害援助市民センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10

TEL: 078-578-7744 FAX: 078-574-0702

E-mail: info@code-jp.org

HP: http://www.code-jp.org/